



学 校 便 り 琢 磨

第 1 6 号 R2. 8. 27 三豊市立詫間小学校

熱中症対策について

例年なら、まだ夏休み中ですが、今年は、既に2学期がスタートしています。また、今年の厳しい暑さは、なかなか和らぎそうもありません。新型コロナウイルス感染拡大も心配ですが、熱中症も命にかかわります。十分に気を付けておかなければなりません。

そこで、熱中症対策について以下の点を担任から、子どもたちに説明しましたので、お子様とも相談の上、明日から、お子様の体調等に合わせた対応をよろしくお願いいたします。

- ① 通学用の雨傘を、日傘代わりに使って登下校してもよい。ソーシャルディスタンスを取ることもなります。
- ② 体操服で登下校、体育以外の授業を受けてもよい。(登下校の帽子は通学帽)
- ③ カッターシャツ、ポロシャツ、体操服の代わりに、白色(ワンポイント可)のTシャツを着用してもよい。いずれの場合も名札は付けること。
- ④ 本校では、上着はズボンの中に入れるように指導しているが、この時期に限っては体温の上昇を防ぐために、ズボンの外に出してもよい。
- ⑤ 着替えやタオルを持参してもよい。名前を書いておくこと。
- ⑥ 最後に保護者の皆様へのお願いです。水筒には、お茶、お水(スポーツドリンクも可:できれば薄めたもの)を十分な量お願いいたします。

なお、この対策の期間は、9月下旬を目途に考えております。対策の終了については、学校便り等でお知らせします。

新型コロナウイルス感染防止対策について

「感染防止対策と教育活動の充実の両立」というのが、校長としての私の現在の最大の課題です。例えば、音楽の授業ですが、現在は、リコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏は行っておりません。飛沫感染の可能性が高まるからです。これらの楽器の演奏を全く行わなければ、感染リスクは下がりますが、音楽の授業は充実したものにはなりません。

ある学校は、音楽室の窓を全開にして、できるだけ窓の近くから外に向けてリコーダーや鍵盤ハーモニカを演奏していると報道されました。

本校では、右の写真のような演奏コーナーの設置を進めています。私が、手作りで作業をしているので、少し時間がかかりますが、完成次第、活用していく予定です。

- 音楽室の運動場側の窓のロッカーを利用して、4人が一度に外に向かって演奏できるスペースを作っています。それぞれのスペースの窓は、開けた状態で演奏します。
- 線香を使って、空気の流れを実験してみました。窓の外に向かって煙は流れていきました。もし、教室内に流れ込む場合は後方から、扇風機で風を送るようにします。
- このコーナー(写真参照)は、運動場側に3か所設置しますので、一度に12人が練習できるようになります。



おじいさんと、おばあさんの盆休み

今年の盆休み。おじいさん、おばあさんの家への帰省（里帰り）を控えたという方も多かったのではないのでしょうか。報道で、そのようなニュースが流れると、私は、ずいぶん前のことですが、姉の帰省のことを思い出します。

4歳年上の姉は、大学を卒業してすぐに結婚しました。それからは、ずっと大阪や滋賀で暮らしています。姉には、女の子と男の子が1人ずついて、お盆の頃には必ず2人の子どもを連れて帰省していました。

お盆が近づくと、いや、7月になったら、うちの父（おじいさん）と母（おばあさん）のお盆休みの準備は始まります。

「子どもたちが大きくなったから、布団を買い換えないといかんなあ。」

「そうや。2階の部屋のエアコンも、効きが悪いから、新しいのを買うか。」

年間に、数日しか使わない布団を買い換える？まだ十分使うことができるエアコンを買い換える？当時の私には、なかなか理解できないことでしたが、両親の思い切りのよさには驚かされました。両親は、普段は、実に「質素・儉約」な生活をしていますが、この時ばかりは、思い切りがいいというか、気前がいいというか……。娘と孫が帰省する1か月以上前でも、このような状態ですから、1週間前になるとどうなるのかは、皆様も想像がつくと思います。とにかく、これでもかというくらいに掃除をします。冷蔵庫には入り切らないほどの飲み物や食べ物を買ってきます。ある年などは、入り切らない食品のために、もう一つ冷蔵庫を用意したこともありました。もちろん、当時、若かった私の家での仕事も、この時期になると急激に増えたものでした。まさに、エンジン全開の状態です。

そうして、娘と孫たちの帰省の日がやってきます。高瀬駅に迎えに行き、「おじいちゃ〜ん、おばあちゃ〜ん！」と、さけびながら走り寄ってくる孫たちの姿を何か月も楽しみに待っていた両親の幸せな時間が始まるのです。普段は、どこそこが痛い、めまいがすると嘆いている母から、この期間、そんな言葉は、一言も聞いたことがありませんでした。

専業主婦の姉は、帰省しても子どもの世話や家事をがんばっていました。

「お姉ちゃんは、いつも一人で家事や子育てをがんばっているんやから、家に帰った時くらいは何もせんでええよ。」

と、母は姉に言います。もちろん、姉が、手を止めることはありませんでしたが……。父と母の準備というのは、孫たちを迎えるだけではなく、嫁いだ姉が、数日間、娘に戻るための準備でもあったのです。

姉とその子どもたちの帰省は、子どもが幼い時ほど長く、大きくなるにつれて、段々と滞在期間が短くなっていきましたが、どの年も、楽しい時間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

「また、おいでよ。待つとるからね！」「おじいちゃん、おばあちゃん、また来るからね！」

高瀬駅で孫たちを見送り、いっしょに行っていた私に向かって、母は毎年、必ずこう言いました。

「あーっ、ほっとした。姉ちゃんや孫たちが帰ったから、これでやっと休めるわ。」

私には、「ああ、さみしい。姉ちゃんや孫たちが帰ってしまったら、気が抜けてしまったわ。」としか聞こえませんでした。その日から、おじいさんと、おばあさんの本当の盆休みは始まるのです。

あれから数十年。その姉も、おばあさんになりました。姉の娘は、2人の子どもの母親です。下の子ども、昨年、結婚しました。そういうことで、姉は、盆やお正月には帰省してこなくなりました。それは、姉が、姉の子どもたちの「ふる里」になったからですね。